
反転白黒夜月妖-ハンテンシロクロヨルツキアヤシ-

悠風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反転白黒夜月妖 - ハンテンシロクロヨルツキアヤシ -

【Nコード】

N8845C

【作者名】

悠風

【あらすじ】

妖葬師。人を害する、もしくは理由があつて逝くことの出来ない妖や魂を葬る力を持つ人のことをそう言う。とある理由で王を殺した罪人妖葬師の少女と何が何だかわからないまま罪人に仕立て上げられてしまった青年の可笑しな妖葬・逃走が始まる。

反 逆 ハンギヤク

辺りは全て炎の赤で埋め尽くされていた。
赤の中心にいるのは二つの頭を持つ大蛇と、今はもう炎の海となつてしまつたこの町の長である。

二つ頭の大蛇は片方の頭の瞳の色が赤く、もう片方の頭の瞳が青かつた。だが、青いはずの右目は長剣が突き刺さり真つ赤な血を溢れさせ、成人男性を軽く飲み込めてしまいそうなほどに大きな口は真紅の炎を吹き出し、長い胴体を鞭のようにしなせながら、怒り狂つたように暴れていた。

激しく風を斬る音。

「……ぐっ……!？」

勢いよく振るい上げられた大蛇の尾を全身に叩きつけられた彼はありえない方向に体を曲げて、そのまま地面を抉るようにぶつかった。大蛇の体の中で最も細い部分だとはいえ、それでも大木程度の大きさは軽く超えているのだ。満身創痍で立ち上がることさえ精一杯であつた彼でなくとも、そんなものを喰らつてしまえば普通の人間なのであれば、ひとたまりもない。

「く……そっ……あん、な……妖に……ッ……!」
あやかし

霞んだ視界に映る赤を見て、彼は涙を流した。

あんな妖に大切な家族や友人、それにこの町の住人達を皆殺しにされて、それなのに自分は青い右目一つを潰すことしか出来なかつた。それが悔しい。あの人たちの仇をとれない自分の弱さが酷く憎い。そして今自分がその妖に殺されかけていることが辛い。自分は無力なのだと認めてしまうのが、何より怖い。

「……う」

音が聴こえない。体中の感覚が無い。ただぼんやりと、憎い大蛇の尾が自分の体を貫こうと振り下ろされているのが見える。

悔しい悔しい悔しい悔しい。憎くて憎くて仕方ない。

しゃん。

鈴が鳴るような小さな音。

音が聴こえないはずの彼の耳に届いた、脳裏に響く澄んだ音。彼は荒れていた心が落ち着くのを感じた。

しゃん。

彼が最期に見たものは、月のような光を纏いながら大蛇の尾を斬り捨てた、黒髪の少女だった。

長い黒髪を靡^{なび}かせながら、少女は歩いていった。

王の為にと無駄に金を注ぎ込まれた豪華絢爛な城には似合わないぼろきれのような羽織、見た目より動きやすさを重視した服装の少女は横を通る者達に顔を顰^{しか}められているのに気付いているのかいないのか、ただひたすらに無表情のまま歩を進める。

そして、この城の中でも特に豪華に飾られている部屋の前で立ち止まった。

「妖葬師^{ようそうし}の臙^{よう}です」

分厚い扉に阻まれてくぐもった声が部屋に入るよう命じる。臙と名乗った少女は命じられたように静かに部屋へと入った。

部屋にいたのはこの部屋の主であるこの国の王と、そして王の身の回りの世話を命じられている少女、臙と同じ妖葬師の頂点に立つ男の三人だ。

「貴様のような奴が王に何用だ」

苛立ちを隠そうともしない男が臙を睨みつける。それを平然と見返した臙は王へと視線を向けた。

「王。お伺いしたいことがございます」

静かに、けれども良く通る声で言う。少女に酒を注がせていた王は一瞬臙へと目を向けたが、すぐに酒の入った器に視線を移した。

「先程、城下の町の一つが大蛇の妖に襲われ壊滅しました。その大蛇には頭が二つ……一つが赤目、一つが青目のものでした」

「それがなんだというんだ！町が壊滅したのは貴様が鈍いからだろう！そんなことをわざわざ言いにきたのか！？」

ぎゃんぎゃんと頭の悪い犬のように吠える男に多少顔を顰めながら、臙は続きを話す。

「その大蛇は何者かに操られていたようなのです」
ようやつと真剣に話を聞く気になったのか、王は臙を目に捉えた。

「何か心当たりはございませんか、王」

「ほう。お前は私を疑っていると、そういうことか？」

口元に笑みを浮かべた王は隣にいた少女に酒の入った器を渡す。

「いえ、別にそういう訳ではありません。ただ、その大蛇の左の赤目に王族しか使うことの許されない妖の操縦術の痕跡を見つけたものですから」

真っ直ぐに王を見据えるその瞳は鋭く、それだけで人を殺せてしまいそうだった。

そして見据える先にいる王もまた、人の魂を抜いてしまえそうなほどに暗い瞳をしていた。

「私には兄弟がいらない。妻もいなければもちろん子供もいない。両親　前王と王妃は妖に襲われ死んだ」

「そうだ。あなた以外に王の名を持つ者はいない」

広く煌びやかな王室の温度が一気に下がる。そんな錯覚を起こしそうになるほどに両者を取り巻く殺気が研ぎ澄まされてゆく。

あまりの恐怖に瞬き一つ出来なくなってしまう少女は力の入らなくなつた手から酒の入った器を落とす。妖葬師の男は情けないこと

に口から泡を吹いて失神していた。

男のように失神出来たなら、どれほど楽だっただろう。少女は壊れた人形のように立ち尽くす。

「そうさ。 両親は、俺が殺した。こうして操った妖どもであつー！」

狂ったように嗤いながら、襲われる臃と少女を観賞する。

「それは……それは、何の為に！」

襲ってくる妖を手ごろな場所にあった花瓶で殴りつける。

「何の為？可笑しなことを訊く。そんなもの 私が愉しむ為に決まっているだろう！？」

臃は胸の内が冷えてくるのを感じた。

こんな王の為に、あの町の人々は死んでいったのだ。こんな王に操られて、妖たちは怨まれながら死んだのだ。

「ああ、ならば遠慮する必要はないな。私は貴様を殺す。この命に代えてもだ」

面白い、そう嗤った王は王室から去っていった。勢いよく閉められた扉の音が妖の呻きと重なり掻き消える。きつとどれかの妖を通じて臃たちの様子を窺^{うかが}っているのだろう。

「……ひつ……！」

少女の怯えた声。見れば少女の体を目掛けて鋭い牙を剥いている妖がいた。

別に、腰に差している剣で斬りつけても良かった。けれどそんなことをしてしまえば少女は今以上に恐ろしい思いをすることになるだろう。それだけはどうしても嫌だった。これ以上この少女が怖がることも、妖が憎まれることも、臃は嫌だったのだ。

「……その机の下に隠れている！ 何があっても目は開けるな！」
少女を庇い腹に食い込んだ牙を自らの肉を千切らせるようにして逃れた臃は少女が机の下に隠れたのを見て、剣を抜いた。

怪我人とは思えない身の軽さで妖の攻撃を避け、少女だとは思えないほどに速く、重い剣を操る。

ばたばたと腹から赤い血を滴らせながら朧は舞うように動く。赤い血がまるで桜の花びらのようだった。

しゃん。

不釣合いなほどに澄んだ音を最後にその戦いは終わった。

荒い息のまま少女の隠れている机へと向かうと手を伸ばす。

「……っ、怪我、は」

「い……や……いやッ！ 触らないで！ この、化け物っ！！」

がたがたと震える両手で、この机の上に置いてあった果物のたくさん入った籠にあったのであろう小刀を朧に向けると、少女は威嚇するように叫ぶ。

朧の伸ばしかけた手が痙攣したように一度震え、力無く下ろされる。少女には、自分を守る為に戦った朧がまるで、血に飢える化け物のように見えてしまったのだ。赤い花びらを舞わせながら踊るように妖を倒していった朧に、恐怖を抱いてしまった。少女たちに危害を加えようとした王よりも恐ろしく、美しく だからこそ何よりも恐ろしい。

「これ以上近づくな、この刀で……あんたを殺すわ……！」

妖の血で汚れた顔に貼りついた髪が影となって表情はわからなかったが、何も言わず朧は少女に背を向けた。

近くにあった窓から外に飛び降り夜闇に紛れ血に塗れたその姿を隠し、人目につかない場所に逃げるのだ。

しゃん。

澄んだ音が大蛇の耳に届いた頃にはもう大木ほどの太さとそれ以上の硬度を持つ尾が斬り落とされていた。

尾を斬り落とされた痛みからなのか、怒りからなのか、地鳴りのように呻き声を上げた青目の大蛇は炎の息を吐く。それと同時に臙の足が地を蹴った。まるで獲物を見つけた獣のような速さだ。

「さあ、これでもう終わりにしよう」

そう言つて跳躍する。城くらいの高さはある青目の頭の上へと降り立った臙は月の光に反射する白刃つひばをその顎あごに食い込ませ、風のように薙なぐ。

町を覆う炎と同じ色をした血を撒き散らしながら、大蛇は空に向かって遠吠えをした。

しゃん。

鐸鳴りの音がして、二つ頭の大蛇は崩れ落ちる。

暴れていた青目の頭とは違い、ぴくりとも動かなかった赤目の頭はその左目の真ん中にぽっかりと穴が開いたように人間の目があった。

「……これで、八つ目」

これは、呪いだ。操縦術という名の、呪い。

王族が妖を操り天下を取ろうとした際に生み出した忌まわしき呪い。呪いをかけられた妖は体の一部が動かなくなる。今回の大蛇の場合、それが赤目の頭であった。

切なげに表情を歪めた少女は大蛇に差し出すように細い手のひらを翳す。

淡い光を指先に作り出し、大蛇の体に触れる。

「もう、お眠り」

光が弾けるように大蛇を包み込み、大蛇のその体をも光へと変える。それはまるで天の川のように夜空を駆け上り、蠟燭の火を消すように消えた。

空から零れた雫が辺り一面を真っ赤に染め上げていた炎を鎮めてゆ

く。

柔らかな月の光と散らばりながら輝く星々が空から零れる雫をまるで光の欠片のように見せていた。

反噬 ハンゼイ

暗く閉じられた黒の部屋を月の光が僅かに照らしている。

そこに朧はいた。壁に体重を預け、疲れたように肩を上下させながら座り込んでいる。

妖の牙に抉られた横腹からの出血は何とか止めたものの、どうやら血を流しすぎたらしい。目の前が霞み、音は壁を一枚隔てたかのよう^{へた}に遠い。体中が冷え切って呼吸をすることすら辛く感じる。

当然と言えば当然だ。大蛇との戦いで疲労があつたというのにその状態のまま数十匹の妖と怪我を負いながらも戦ったのだから。本来ならば死んでいても可笑しくはない。

「…朧様」

聞き慣れた声が何処から聞こえてくる。

この声は、そう。幼い頃からずっと傍にいた、男のもの。朧が唯一、安心して背を預けられる人の声。

「……た、っ…」

立ち上がるうとして、力が抜ける。止血をしたとはいえ傷が完全に癒えたわけではないのだ。動かなくても酷く痛む傷を負いながら立ち上がるうとしたならば、それ以上の激痛が走るのは当たり前のことである。朧は小さく呻くと右の手で反対の腕を掴んだ。痛みに耐えるように力を入れた指先が白い肌を傷つける。ぱたぱたと零れ落ちた真紅の血が床を汚した。

「朧…っ、城、は……どう…なつた……っ」

途切れ途切れに紡がれた言葉に朧と呼ばれた男は無言で返し、痛み^{たいく}に苦しむ少女を抱えた。月の光に照らされた男の大きな体躯^{たいく}には全身に無駄なく筋肉がついているのがわかる。褐色^{かつしよく}の肌に光を反射する銀髪が良く映えていた。

男は朧が座り込んでいた部屋の更に奥　月の光さえ届かない暗闇の部屋へと入ってゆく。

その部屋に敷かれた布団へ朧の小さな体を横たえると、男はそこでようやく能面のうめんのようだった顔に表情を出した。

「まったく…。あなたはいつも一人で何もかもを背負おうとする。城の心配よりまずはご自分の御体おからだを心配なさってください」

呆れや怒り、安堵の感情が緋ない交ぜまになつて、ため息として外へ出る。これだからこの人から目を離せないんだ。一人にさせてしまう

と何を仕出してかすかわかったものではない。

痛みで寝付けそうにもない状態の朧を一瞥いちべつし、懐ふところに忍ばせてあつた睡眠薬を取り出すと、か細い呼吸を繰り返す口元に布で包んであつたそれを軽く押し当てる。抵抗する力すらない様子の朧はそのままゆっくりと瞳を閉じ、意識を遠のかせながら考えていた。

…何故。

何故、龍はあんなにも切なげな色の瞳をしていたのだろう。
今の朧にそれを知る術すべはない。

微かに聞こえた金属と金属がぶつかり合うような音。

その音で目を覚ました朧は横たわつたその場所から見える小さな窓の外の景色を見て瞠目ぼうもくした。

あの、大蛇だいじゃを葬つたときのような赤と鳥のような姿をした妖とそれの攻撃を防いでいる龍の姿が見えたからだ。

慌てて起き上がろうとして腹から全身に激痛が走る。自然と痛みの原因に目が向いて、真新しい包帯に気がついた。

どうやら眠っている間に龍が換えてくれていたらしい。朧が巻いたときよりもずっと丁寧なそれに手を添そえたそのとき、外から聞こえた叫び声。

「朧様っ！」

龍が叫んでいるのは自分の名前だ。けれど窓から見えていたはずの龍の姿が見えない。大蛇を葬ったときのように赤い夕焼け空が見えない。何故ならそれは、先程まで龍と攻防を繰り返していた鳥型の妖が龍のいる部屋に　窓に鋭い嘴くちばしを向けて風のように飛んできたからだ。その妖が窓いっぱいになるまで近づいていた所為で、何も見えなかったのだ。

今の龍は戦うどころか逃げることもすら出来ない。剣は手の届かない場所に置いてあるし、体を起き上がらせるだけで引き裂かれるような痛みが走るのだから。

「くそ……ッ」

窓から影のように妖が滑り込んでくる。動かない龍の体を目掛け剣のように鋭い嘴が迫る。

目と鼻の先。

雷が空を裂くような音がして、妖の体が部屋の壁に叩きつけられた。右手に青白い線のような光を纏わせて龍が上体を起こし、苦痛に顔を歪める。妖の体が叩きつけられたのは右手の光が関係しているらしい。

「さすがにこれは……きつい、か……っ」

痛みに耐えるように身を丸める。その顔色は、まるで死人のように色が失せていた。

「龍様！……あとは私がやります、龍様はそのまま、絶対に動かないでください！」

妖と戦っていたときは比べ物にならないほど落ち着きをなくした龍が叫ぶように言う。それほどに龍の状態は危険なのだ。じわりじわりと真白の包帯に滲む赤が濃くなるにつれ龍の意識は遠く、どこかへ飛んでいきそうになる。その度に龍は自らの手首に爪を立て、その痛みで今にも途切れそうな意識を保っていた。

「龍様……っ」

壁に叩きつけられ動かなくなった妖を手にしていた剣で貫き殺した龍が、常に穏やかなその瞳に明らかな焦りの色を滲ませ走り寄って

くる。

血の滴る細い手首を小さく震える手のひらで痛いほど強く掴んで、龍は。

迷子になってしまった幼子のような表情で。

焦りと哀しみと苦しみと切なさとなった一つの絶対の誓いをその瞳に緋い交ぜにして。

手にした剣で、龍の胸を貫いた。

満月が輝く静かな夜だった。

まだ十にもなっていないであろう少女が、妖と呼ばれる人間に危害を加える異形のものに殺されかけていた青年の前に現れたのは。

しゃん。

自らの背丈よりも大きい剣を何の苦も無く操るその少女は何の躊躇もなく、剣を振りかぶった。

「もう、お眠り」

妖を倒し葬ることを役目とする妖葬師しかできないはずのそれ。妖の軀を、魂を昇華させるその術。子供特有の甲高い声が妖を眠りにつかせる為の言葉を紡ぐ。大人びた表情をした少女は青年を一瞥し、困ったように眉根を寄せた。

子供というには無邪気さの欠片もなく。大人というにはその姿はとも幼く。

「お前……何だ？」

人というにはあまりにも美しく。妖というにはあまりにもかけ離れていて。

まるで まぼろし。

「臙。私は、臙だ。 お前は、名が無いのか」

少女の言う通りだった。青年には名前というものがなく、帰る家も待つ家族すら存在しなかった。

青年にとつてそれは当たり前のことだったし、名前がなくとも何の苦勞もなかったから必要を感じたことすらない。

「ならお前は今から臙だ。私の名から月を取ったこの字が、お前の名だ」

がりがりさやなと剣の鞘で均された地面に文字を描く。月明かりに照らされたそれは、まるでその字自体が輝きを持つているかのように光り輝き、とても眩しかったのを憶えている。驚いたようにその字を見つめ続ける青年を 臙を見た臙がとても穏やかに笑んだのを憶えている。憶えている。憶えている。

まるで昨日のことのように、あの夜のことは全て思い出すことができる。

雲の数から、虫の鳴き声まで、全て。

あの日のあの夜からあの人は臙の全てだった。全てをかけて守らなければならぬ人だった。

それが覆されたのは、ほんの少し前。

たった一人の、名をくれたあの人以上に大切な存在ができたのは。全てをかけて守りたいと思った。この人の為ならば自分は幾らでも傷つくことができる、そう思った。

たった一人の、大切な大切な女性だった。だから。

だから。

口元から零れた紅い血は色を失くした朧の顔に良く映えた。

「……………ッ」

声にならない叫びが喉を迫りあがる熱さに途切れる。血を吐いて倒れた朧に笑みを浮かべ、龍は立っていた。

口元だけを笑みの形に歪ませ、瞳を苦しみと哀しみで揺らしながら、龍は立っていた。涙は 出ない。出るはずもない。何度も何度も夢の中でここまでの流れを繰り返してきたのだ。絶対に失敗しないように、絶対に涙を零さないように、絶対に 大切なものを守る為に。

「こうするしか、なかった。こうするしかなかったのです。こうするしか、捕えられたあの人を救う術がなかったんだッ！！！」

龍は泣き叫ぶように沈み始めた夕陽の中で吠えた。

懺悔するように、後悔を振り払うように。苦しかった。哀しかった。夢の中で枯れ果てたはずの涙が零れそうになる。

ああ。早く行かなければ。あの、血で汚れきった城に大切な大切なあの人捕えられている。自分の助けを待っている。

龍は朧に背を向け、歩き出した。

もう二度と戻ることのできない道を、歩み始めたのだ。

反撃 ハンゲキ (前書き)

暴力的な描写があるので苦手な方はお気をつけください。

反撃 ハンゲキ

冷たい何かが額に触れて、おぼろ朧は目を覚ました。

暗い、洞窟のような場所。湿った空気が肌に纏わりついて気持ちが悪
い。

「気がついたみたいだな」

聞き慣れない男の声。額に触れていた冷たい何かが離れ、痛む身体を無理矢理に起こそうとする朧を押さえつける。

「その怪我で起き上がるのは無理だつての。あんたもあれだろ、妖に村襲われて生き残った奴」

俺もそうなかっただけさ、何かよくわかんねえけど王様に刃向かったとかで罪人にされちまったんだよな。へらりと笑い、男は頭を掻いた。

罪人と同じ場所に捕えられているということは、朧自身も罪人であるということなのだろう。あれからどれだけの時間が経ったのだろうか。龍は、たうどうしているのだろうか。

もっさう朦朧とした意識の中で聞き取った龍の叫び。大切な人を守る為に朧を刺した。あれは優しいから、きつとそのことに対して深い罪悪感を感じているはずだ。大切なものを守る為には何かを犠牲にしなくてはならない。朧の中ではそれが当然のことであっても 龍の中でそれはきつと、理解し難いものなのだろうから。

「ま、罪人同士仲良くしようぜ。俺は水華。すいかあんたは？」

妙に明るい 否、明るいわけではない。ただ、諦めて自暴自棄になっ
ていている男の声が牢に響く。

暗い所為ではつきりとは見えないが、水華と名乗った男の目はこの世の全ての絶望を知ったかのように冷め切った色をしていた。まるで、龍と初めて出逢ったときのようにうだと思ふ。妖に殺されかけているにも関わらず、声一つ上げなかったときのあの表情。あの冷え切った目。呆れを通り越して笑えてしまうほどに頑かたくなだった、あの頃。

「臃だ。手当てをしてくれて有難う。やることのないのなら、ここから出るのを手伝ってくれ」
死んだ魚のような目が驚きに大きく見開かれたのを感じ、臃は満足げに笑みを浮かべた。
こういう目をしている奴ほど、本気になったときは想像を絶するような力を発揮するのだ。

狂っている。
狂っている。

国王もまわりの人間も皆、狂っている。

村が燃え灰になる様を、人々が妖あやしに喰い散らかされる様を、何故笑って見ていられるのか。

狂っている。

狂っている。

血の赤で汚れた手。その手には真っ赤に染まった剣き。貫いたのは、守ると誓った、大切な。

声にならない悲痛な叫び。涙は出ない。出るはずもない。自らの手で、殺したのだ。

ああ、自分は。

狂って、いる。

満身創痍で牢から出た二人を待ち構えていたのは、全ての原因であ

るこの国の王だった。

まるでこうして二人が牢から出てくることが最初からわかっていたかのように、愉快げに口元に笑みを浮かべ立っていた。

「まだ生きていたとは、驚いたな。妖葬師、臙。どうだ、自分

の従者に裏切られた気分は？」

嘲るような口調で王は言う。

どこか不気味さをも感じさせるその姿に水華は思わず自らの手のひらを握り締めた。

「従者ではない。龍は私の友人だ」

敵意を隠そうともせず臙は即答する。月色の瞳が目の前の男の一挙一動を見逃すまいと鋭く細められていた。

「その友人にやられた傷は、随分と深そうだがなあ。たかだ

か一人の女の為に、馬鹿な男だ」

王がそう言った途端、ちりちりと肌が焼けるような怒気が辺りを包んだ。瞳を怒りの色に染め、血の気が失せ真白になるまでに強く握り締められた拳を小さく震わせた臙が、恐ろしく嗤う。

「私のことならば構わない。だが、貴様ごときに龍のことを悪

く言われるのは、許せない」

可笑しそうに王が笑う。楽しげに、愉しげに、苛立ちを隠そうともせず、笑っている。笑う王の足元から、背後から、影という影から、妖が現れる。操り人形にされてしまった妖がゆらりゆらりと臙と水華の二人を囲む。

ふいに王の笑みが深くなった。その王の背後から今にも崩れてしまいそうに危うい足取りで、一人の男が現れる。全身に無駄なく筋肉がついた体軀。褐色の肌に光を反射して輝く銀の髪。

「た………？」

驚きに見開かれた臙の瞳が亡霊のような龍の姿を映す。血のこべりついた剥き出しの剣、それを握る血だらけの手ひら。初めて出逢ったとき以上に冷え切り凍り付いてしまった、本来はとても暖かな光を宿す瞳。まるで、龍の姿をした別のものようだった。それほ

どに、龍の変貌は凄まじかった。

「あんた……」

水華が、龍を見て苦しそうに顔を歪める。

「殺したのか。その剣で あんたの一番大切な人を」

否。龍ではなく、龍の持つっている剣を見て、顔を歪めたのだ。剣を掴む手のひらを必死に解ほどこうとする、ごく一部の人間にしか見ることのできない魂だけの姿になって、それでも尚なお必死に龍を止めようとしている女を。

妖葬師や靈感の強い者だけが見える 龍には見えないその姿で、涙を流しながら必死に龍を止めようとしていた。

「妖も人間も同じ。簡単に操れたよ 貴様を刺したことに酷く動揺して弱っていたこの男はな」

その言葉で龍は気付いてしまった。聡明な少女はその一言で、この王が仕出かしたことの全てに勘付いてしまったのだ。

「人質として捕えた女を操りこの男を殺させるつもりだったが……あの女、彼は絶対に助けに来てくれるなどとほざいて私の言葉に耳を貸そうともしない。だからこの男を操り女を殺させたが 私の判断は正しかったようだな」

満足げに口元を吊り上げ、龍と対峙たいじする龍を一瞥いちべつする。いやらしい笑みだった。

龍の怒りに燃える瞳が刃のように鋭くその男を突き刺す。白くなるほどに固く握られた手のひらに食い込んだ爪が皮膚を破り血が零れる。

悔しかった。

龍が操られていることより、それで大切な人を殺してしまったことより、それを傍観して笑っている男より、そうなる原因をつくってしまった自分自身が、何より憎い。

「うるさい」

苛立った声。眉間に皺を寄せた王はふいにそう呟いた。

視線の先には龍がいる。正確にいうのなら、龍の腕にしがみつい

ている女が。

どうやら見えているらしかった。昇華されなければならないはずの魂が、見えている。

「そんなにもその男に剣を離して欲しいのならば」

瞳の奥に潜む暗いものを光らせて王は淡々と言う。苛立ちながらも、どこか愉しげに。

「こうしてやる」

にたり、と背筋が寒くなるような笑み。

その笑みが深まった、その瞬間。

赤い紅い、まるでいつか見た夕陽のように真っ赤な視界が広がった。声も無く、音も無く、龍の剣を持っていた手が。腕が。

紅い飛沫をあげながら肩から離れて、そのまま。

龍の胸へ。

「やめ……」

臃の悲痛な叫びを遮り。

「う、あ……」

水華の引き攣る呼吸を止め。

「死ね」

嗤う男の言葉に従って。

愛する人の血がこべりついた剣が。

「龍　　つつつ！！！！！！」

龍を咄嗟に庇った女諸共、貫いた。

一瞬目を見開かせ驚いたような顔をした龍はすぐに、困惑し泣きそうな、それでいて酷く嬉しそうな幸せそうなそんな表情をして地に倒れ　死んだ。命を失う最後の最後。王の操りから解き放たれた龍は、たったひとつのかけがえないものをその腕に抱いて。

優しい声。

龍という名をくれたあのひと、愛情を教えてくれた彼女の声。
自らの手で傷つけた、大切な大切な人たち。
憎かった。自分自身が、とてもとても。

だからあの人たちにも憎まれて当然だと、そう思っていた。

龍

二人の穏やかな声音。

一緒にいこう

手を差し伸べる、愛しい人。

今まで、ありがとう

名をくれた人の、柔らかな笑み。

俺は、この罪を忘れることはできないだろう。大切な人を殺め、傷
つけた。それはきっと、この心に重く沈み^{よご}み続けるだろう。

そうだとっても、俺は。

幸せでした。とても、とても。

あなたに逢えて、本当に良かった。

叩きつけるような衝撃が全身を襲う。

あまりの衝撃に耐え切れず膝をついた水華が目にしたのは、
龍の頬を伝い落ちた一粒の涙だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845c/>

反転白黑夜月妖-ハンテンシロクロヨルツキアヤシ-

2010年10月16日23時46分発行